

「働こう運動」の反動方針を 同喝で強行した第115回定中を弾劾する！



決定的な産報化方針

この一一五回定中報告をのせた動力車新聞第一四一二号（3月10日付）は、組織的動揺をどう喝をもって鎮めようとして、この産報化方針があたかも動労総体の意見であるかのようにけんめいにこの定中を粉飾しています。

しかし、この動力車新聞の中に、「本部」革マル反動分子の本性が何よりも鮮明に示されています。

その第一は、この「方針」が、「闘うための方針」であるかのように強弁していることです。

「機関決定だから正しい方針だ」といくら革マル反動分子が強弁しても、全国戦長方針を見た組合員が、これを「闘う方針」などと考えられるはずはありません。

現に、全国の職場・生産点の動労組合員が「これは産業報国会の増産運動と同じだ」「動労の闘う伝統をセクト的利益のために売り渡し、階級闘争を裏切るものだ」という怒りの声を強め、ゴリゴリの革マル分子でさえも、この方針を「闘う方針だ」と言い切れず、「情勢」だけを繰り返しているのです。

反対する者への憎悪―排除の論理

第二に、この方針に対する反対意見が組織内に広範に存在するということをかくし通せない状況であることをささるをえなくなり、同時に、革マル反動分子の本性中の本性とも言えるべき、排除の思想を全面開花し、反対する者への憎しみをむき出しにしていることを見逃すことはできません。

「修正動議は論議の末撤回」と、あたかも民主的組織運営が行われたかのようなとりつくりをしていいますが、第一一五回定中においても、中央委員が修正動議という正当な権利を主張することを運動論・組織論で論議するのではなく、「ため

日刊 動労千葉

82,3,22

No. 全国版 105

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五（六）八〇〇〇（電）七二〇七

動労第一一五回定期中央委員会は三五万人体制に労働組合の側から率先協力してゆく産報化方針を、革マル反動分子の引きまわしにより、職場・生産点の当然の不安、不満、怒りの声を圧殺することを通して強行決定しました。

しかし、このことを通して、全国の動労組合員の「本部」革マル反動分子による動労組織の私物化、労働者への裏切りに対する糾弾の声が一挙的に高まり、組織不信におちいり動労を脱退する組合員が出るなど、組織崩壊につながりかねない動揺を深めています。

にする議論」などという形で封じ込め、セクト人間にしかわからないコジツケ論理を長々としゃべりまくる「理論闘争」でこれを正当化しようとする「いつものやり方」で強行したということです。

会議場以外の場所で「修正動議をとりさげろ」「提案者からおりろ」という圧力があつたことも十分に想像できる内容となっています。

職場に充滿する「働け運動」への怒り

動労内に「働け運動」に反対する組合員の声が広範に、圧倒的に存在するということを代弁した良心的中央委員の修正動議は、誤まれる路線転換に対して修正せず、具体的闘いの展開の部分でのみ修正を求めるといふ弱さがあります。「言葉の使い方はどうであれ、働き度を前面化することはまちがいがい」だということを主張しています。

われわれは、この第一一五回定中での良心的発言や、革マル分子が牛耳る東京地本内で脱退さわぎが起こっていることに端的に示される職場の怒りに応え、動労大改革＝戦闘的国鉄労働運動の再生へ向けて、さらに闘い抜かなければなりません。

自らの危機をインペイするための 動労千葉攻撃を粉碎せよ！

すべての皆さん！ 「本部」革マル反動分子は自らの組織的危機と「働こう運動」の反動性をインペイすべく、革マル反動分子の手先・土屋粹に「千葉の組合員は6・12」のような暴力で動労千葉にしばられている」これまた「本部」革マル反動分子の勝手な解釈「除名者以外は『本部』の組合員」したがって「90%の組合員は本部へ来たがっている」「全国オルグをやってくれ」というベテンの発言をさせ、それを口実に動労千葉への組織破壊攻撃を強行しようとしています。われわれは、この挑発攻撃を真向から受けて立ち千葉の地にあつて「本部」派を称する諸君に、このことの責任をはつきりと自覚させ、デッチ上げ「千葉地本」解体をもつて「本部」革マル反動分子に懲てやろうではないか。